

# 鹿児島医セン

連携室だより

2007.8 No.17

鹿児島医療センター（循環器・がん専門施設）

## 第5回 脳卒中市民講座

当院での脳卒中センター・SCU発足を記念して、第5回脳卒中市民講座が去る7月1日（日）、かごしま県民交流センター 県民ホール（旧県庁跡）で行われました。

脳卒中市民講座は、平成15年に第1回を開催して以来毎年行ってきたもので、一般市民を対象として、広く市民に脳卒中の知識を普及させ、脳卒中の予防、早期治療への理解を深めることを目的としたものです。

鹿児島医療センターに加えて、日本脳卒中協会鹿児島県支部、鹿児島市、鹿児島市医師会、鹿児島県医師会、三菱ウェルファーマの共催で行い、NHK鹿児島放送、南日本放送、鹿児島テレビ放送、鹿児島放送、KYT鹿児島読売テレビ、エフエム鹿児島、鹿児島シティエフエム、鹿児島健康づくり推進市民会議にも後援を頂きました。

今回は、「脳卒中最前線—もしも脳卒中になったら—」というテーマで、はじめに濱田陸三脳血管内科部長による基調講演「知っておきたい脳卒中の話」（司会：西山ゆかり副看護部長）を行い、その後パネルディスカッションが行われました。

パネリストは

■ 脳血管内科の立場から

〈松岡秀樹 国立循環器病センター内科脳血管部門〉

■ 脳神経外科の立場から 〈今村純一 脳神経外科医長〉

■ 救急救命士の立場から 〈白崎和史 鹿児島市消防局〉

■ リハビリテーションの立場から

〈鶴川俊洋 リハビリテーション科医長〉

■ 薬剤師の立場から 〈平山俊一 副薬剤科長〉

■ 栄養士の立場から 〈木之下道子 栄養管理室長〉

にお願いし、西山副看護部長、濱田脳血管内科部長の司会で進行しました。

昨年の第4回講座では定員400名のところに500名を超える来場者があったため、今年は600名を収容できる会場を準備しました。このような大きな会場を準備した上、梅雨のさなかで雨模様が続いていたため、がら空き状態を心配していましたが、当日は幸い天気にも恵ま



会場の様子

れ、来場者が690名を超えるという大盛況でした。このため看護学校の学生さんなど若い方には、せっかく来ていただきながら立ち見で勘弁して頂くなどご迷惑をお掛けしました。

最後の質疑応答は、活発な質問が寄せられたため大幅に時間超過しましたが、ほとんどの方が最後まで熱心に聴いて頂きました。事後のアンケートでも大変な好評で、69.9%の方が「とても良かった」、26.8%の方が「良かった」と回答し、88.4%の方から「次回も参加したい」との回答を頂きました。

無事成功裏に終了できましたこと、あらためて皆様に感謝申し上げます。（脳血管内科部長 濱田 陸三）

# 職場紹介

## 西4階病棟

西4階病棟はH19年4月より、血液内科・泌尿器科・小児科の混合病棟となり医師を含め総勢34名のスタッフが勤務しております。

患者様の約60%が65歳以上のかたですが、新生児からご高齢の方まで幅広い年齢の患者様が入院されています。

また当病棟はがん病棟の一端を担っていてもいます。造血器腫瘍、尿路系・前立腺腫瘍の患者様は、化学療法、放射線療法、手術などの治療を受けられます。特に最近では同種・自己の造血幹細胞移植も積極的に行っています。

初めての入院、病名の告知と患者様の心の動揺は計り知れません。そのためにも、看護師はそれぞれの受け持ち患者様の言葉に耳を傾け、今どんな思いでいるのか、何を望んでいるのか等、患者様、ご家族の気持ちに添える看護をしたいと一生懸命努力しております。しかし、看護師だけでは解決できない問題も多くあり、



医師・薬剤師・栄養士も参加する定期的なカンファレンスを行っています。時折、熱弁を振るいオーバーヒートすることもあります。この情熱を患者様の回復過程に役立たせたいと思います。今後も医療チーム一丸となって、安全で質の高い看護を提供したいと考えております。

(西4階病棟師長 東すみ子)

### ひとくち 診療メモ

#### 「冠動脈インターベンション治療」

冠動脈に対してのインターベンション治療の歴史は1977年に世界で初めての冠動脈バルーン拡張術で幕を開け、現在の治療法に至るまで約30年が経過しました。

当初バルーンによる治療の問題点として、バルーンで拡張には成功するものの、

数パーセントの症例で血管内に解離を生じ急性冠閉塞に陥ることがあげられました。この合併症は死亡にもつながり得るものであったため、解決法が世界中で検討され、金属製のチューブである冠動脈ステントが開発されました。このステントの登場により1980年代になり急性の動脈解離に伴う冠動脈閉塞の問題はほぼ解決されました。一方バルーン拡張術時代から最大の問題であった冠動脈再狭窄については未解決のままで、バルーンでは40%、ステント使用でも20%の症例が半年後には治療部位の再狭窄を生じていました。この問題を解決するため様々な薬、冠動脈の治療器具が試されましたが、十分な成績を得ることはできませんでした。2000年代になり、従来のステントに免疫抑制剤を塗りこんだ薬剤溶出性ステントが登場し、ついにこれまで問題であった再狭窄が解決されるのではないかと世界中が期待したのですが、やはり薬剤溶出性ステントも万能ではなく、従来から問題であった入口部、分岐部、蛇行血管、小血管など解剖学的側面においての弱点に加え、糖尿病や透析を受けている患者では、再狭窄予防効果が十分ではないことがわかってきました。また薬剤溶出性ステント植え込み後1年以上たってからの遅発性のステント内血栓症はこのステントに特有のもので、発生頻度は0.2~0.6%/年とあまり高くないものの死亡、急性心筋梗塞など重大な合併症を引き起こす点で、注意を要するものとして全世界で注目されているところです。このように、完全な道具が存在しない状況下であるからこそ、個々の病変に応じた最適の治療が望ましいと思われます。近年、他の医療分野で注目されているレーザー治療同様、冠動脈内治療においてもエキシマレーザーの応用が始まっております。私どもも昨年より治療効果ももっとも期待できる症例にたいして、日本でも限られた数施設のみで使用可能である冠動脈内レーザー治療を試みております。約一年経過した現在まで8例に使用し、合併症もなく良好な結果を得ています。

“常に最先端の医療を鹿児島で”をモットーに日々努力しております。

(第一循環器科医長 中島 均)

## 登録医医療機関紹介 第5回

## 東内科小児科クリニック

垂水市は近年災害の町として、全国的に有名になってしまっている様ですが、元々はその名が表す如く、“水が垂れる”程豊富に湧き水が出る処である事が、この地名の由来の様です。また霧島程の知名度は無い様ですが気候は温暖で、温泉が随所に湧き出ている為、温泉を利用した飲料水の生産が近年盛んです。錦江湾を眼前に控え、養殖業も盛んです。当院は理事長の東達郎が、1969年に親戚に請われるあまり、当垂水市の川井田先生の旧診療所をお借りして、6月より有床診療所を開設、その後71年に現在地に新築、移転し現在に至っています。理事長の開業当時は、内科小児科、小外科を主診療科とし、昼夜のべつ無く患者に対応、深夜疲れて寝込んでいる理事長を起こすのに一苦勞する母の話をよく聞かされたものです。特に深夜急性腹症や心筋梗塞の患者が来院すると、救急処置に追われながら、何処か引き受けてくれる所があるだろうかと、電話待ちの間も神経が休まる事が無かったと聞いています。その様な生活が続き、病診連携の必要性を痛感する様になった理事長が、医師会病院の設立に奔走、87年に悲願の垂水中央病院が設立されました。

現在当院は内科、循環器内科、一般小児科を主診療科とし、病床数19床(一般病床：11床、療養型病床：8床)の24時間在宅支援診療所として、訪問看護・診療を実施、理事長からのポリシーを受け継ぎ、可能な限り休日・時間外にも対応しています。入院患者さんは70歳以上の高齢の方が多く、肺炎を始めとした感染症、心不全、呼吸不全の割合が高く、又小児救急は殆ど



が専門医に送っておりますが、年に数回軽症患者の入院を受け入れています。理事長以下常勤医1名、非常勤医4名、看護師8名、事務5名、厨房・雑務6名の小世帯ですが、当院での勤務経験が長いスタッフが多く、私の小・中学生時代を知る(!)古参のスタッフも数名あり、古くからの患者さんの病状ばかりで無く、血縁・家族背景までもに通じている為日常の診療の力強い支えになってくれています。鹿児島医療センターへは急性心筋梗塞を始めとした虚血性心疾患、心筋症、脳血管疾患を中心に先生方・スタッフの方々に大変お世話になっております。最近では医療連携室が開設され、以前よりもさらに一層連携がスムーズになり有り難く思っております。今、医療界は厳しい状況にあり、殊に全国的に有床診療所の行方に危惧の念を感じます。病院・診療所それぞれの利点を生かし、互いに連携し合いながら世界に誇れる日本の保険医療を支えていくべきと考えます。

これからもどうぞ宜しくお願い申し上げます。

(東内科小児科クリニック 馬場 香子)

登録医医療機関紹介のコーナーを始めました

掲載希望の医療機関はご連絡下さい。

# 第14回 看護学校祭

## 絆～人と人とのつながり

平成19年6月15日(金)、16日(土)に、高校生や地域の人々、鹿児島医療センター入院中の患者様・家族を対象に、身近な人々や周囲の人々との交流を深め、お互いを思いやる気持ちを再確認したいと考え、看護学校祭のテーマを「絆～人と人とのつながり～」とし、第14回看護学校祭を開催致しました。

学校祭の一貫として、18日(土)に入院されている患者様やご家族の方々が、少しでも癒されるよう鹿児島医療センターでコンサートを開催しました。例年、このコンサートでは、みやまコンセルの瀬戸口浩先生の熱心なご指導をいただき、練習した曲を合唱致します。本年は、少し思考をこらしまして、一緒に参加して頂けるよう『茶摘み』や『みかんのはな』等を取り入れました。また、視覚的にも楽しんで頂こうと、学生が手作りのスクリーンを作成し、病院受付のシャッターに沖縄の映像を流しました。160名以上の方に来て頂き、笑顔や笑い声がきかれ、楽しまれたように感じます。学生は、会場の中で患者様、ご家族と一緒に楽しむことで、繋がりを感ずることができたと思います。

学生は、学校祭での体験を通して、今後看護者になっていくためにとても大切なものを手にしたのではないかと思います。

(鹿児島医療センター附属鹿児島看護学校 市場美織)



### お問い合わせ先

独立行政法人  
国立病院機構

**鹿児島医療センター** (循環器・がん専門施設)

〒892-0853 鹿児島市城山町8番1号  
 (代)TEL 099 (223) 1151 FAX 099 (226) 9246  
<http://www.kagomc.jp>  
 脳卒中ホットライン ▶▶ 090-3327-5765

(地域医療連携室) 濱田、大渡、平田、中島、田添、池上、善福  
 直通電話 ▶▶ 099-223-4425  
 フリーダイヤル専用FAX ▶▶ 0120-334-476  
 ※休日・時間外は当直者で対応します。

